

慶應義塾湘南藤沢中高等部の保健室利用状況 (1995～2009年度) からみた健康課題

合田 味穂* 室屋 恵子* 藤井 香*
 高橋 綾* 清 奈帆美* 徳村 光昭*
 森木 隆典* 井ノ口美香子* 田中 佑子*
 田中 徹哉* 辻岡三南子* 南里清一郎*
 齊藤 郁夫*

学校保健安全法施行規則は、子どもの多様化深刻化している現代的な健康課題を解決することを目的として、平成21年4月に改定された。今回、慶應義塾湘南藤沢中高等部の過去15年間の保健室利用状況およびカウンセリング利用者の年次推移を調査し、当校の生徒の健康課題について検討した。

対象と方法

慶應義塾湘南藤沢中高等部（1995年度～2009年度 各年度の生徒数：中等部約490人（男255人～260人 女225人～230人）、高等部約710人（男350人～355人、女350人～355人））において、保健室利用状況（内科・外科別来室者数（1995年度～2009年度）、症状・部位別内訳（1996年度～2009年度））およびカウンセリング利用者数（2001年度～2009年度）を集計した。カウンセリングについては、当校では1999年度から開始されたが、今回は週2回のカウンセリング体制が確立した2001年度以降を集計した。

成 績

1. 内科，外科別保健室来室者数

中等部は外科，高等部は内科的理由による来室者が多い傾向がみられた（図1）。

中等部では、1999年度および2005年度の来室者数が多かったが、高等部では大きな変化はみられなかった。

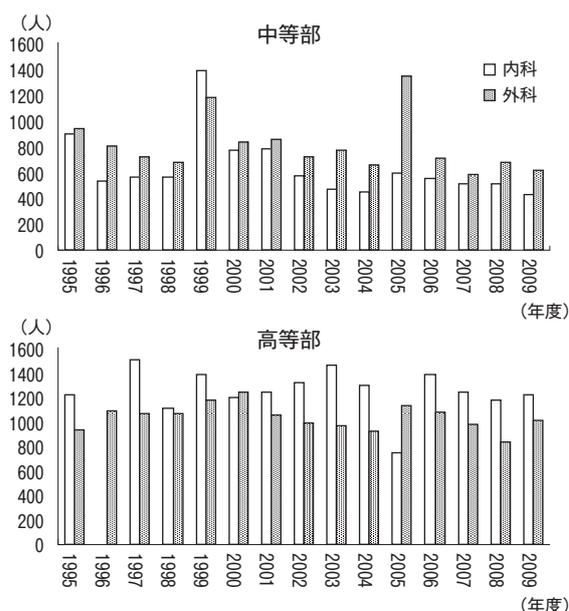


図1 内科，外科別保健室来室者数

* 慶應義塾大学保健管理センター

2. 男女別保健室来室者数

中等部、高等部ともに、15年間を通して大きな性差はなかった。

3. 外科的理由による医療機関への依頼者数 (中等部)

骨折による医療機関への依頼者数は、2003年度に急増したが、2004年度以降は2002年以前よりも減少した（図2）。

創傷による依頼者数は、2003年度以降徐々に減少傾向を認めた。

4. 内科系理由による来室者数 (中、高等部)

頭痛による来室者が過去15年間を通して最も多く、次いで消化器症状が多かった（図3）。

5. カウンセリング件数と利用者

カウンセリング延べ件数は、2001年度以降増加しており、特に高等部では、2001年の85件から2009年は237件と、2.3倍に増加した（図4）。

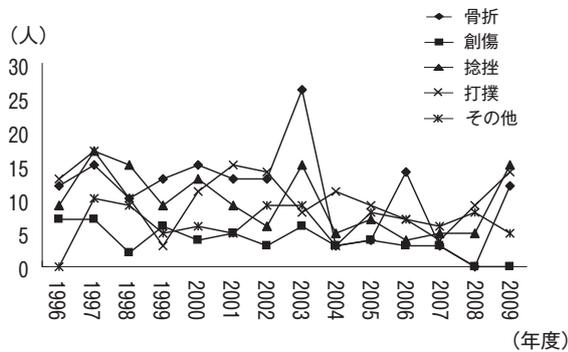


図2 外科的理由による医療機関への依頼数 (中等部)

カウンセリング利用者では、生徒の増加だけでなく、保護者の利用が急増した（図5）。

考 察

対象校の保健室来室者数は、調査期間の15年間を通して中高等部合わせて年間3200～4200人で推移した。1日当たりの平均来室者数は16人で、全国の中学校・高等学校の平均利用者数（36.7人¹⁾や神奈川私学の平均利用者数（34人/日²⁾と比べて少なかった。しかしながら、今回集計した保健室来室者は、内科的、外科的理由で保健室において処置・対応した生徒のみで、その他の保健室で実施している健康診断、健康相談、身体計測等で来室する生徒を含まない。このため、実際の保健室来室者数は、全国や神奈川私学の平均値を上回るものと推測される。また、対象校では、高等部生の来室者数が

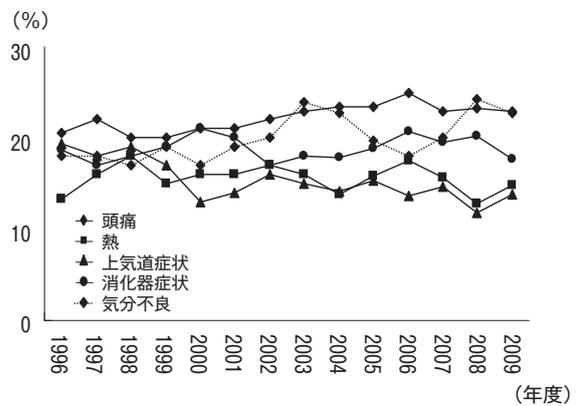


図3 内科系理由による来室者数 (中・高等部)

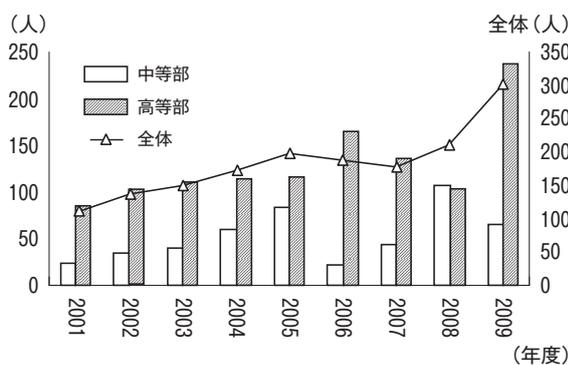


図4 カウンセリング件数

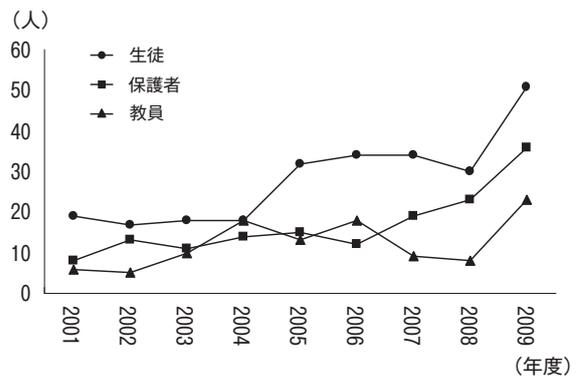


図5 カウンセリング利用者

中等部生に比べて多かったが、中高一貫校が多い他の神奈川私学の保健室利用状況²⁾に合致した成績であった。中等部生が高等部生に遠慮して、保健室を利用しづらいことや、中高等部生の教室と保健室の位置関係などが一因と考えられる。

保健室来室者の内訳では、中等部生は外科的理由、高等部生は内科的理由による来室者が多かった。学年が高くなるにつれ、内科的理由による来室者が増加し、さらに内科的理由では、「気分不良」といった不定愁訴的な理由の増加が近年目立っている。日本学校保健会の調査¹⁾においても、学年の上昇とともに「体調が悪い、痛む、苦しい」などの来室理由が増加し、高校生では「体の問題や体の悩み」による保健室来室が多いことが報告されており、今回の成績と一致していた。

カウンセリングについては、2001年度の調査開始後、件数の増加が著しく、生徒だけでなく保護者の利用が急増している。対象校は海外帰国子女が全生徒の15%を占めるという特徴があり、海外での生活習慣や文化の違いや、父親の海外単身赴任による不在等がストレスとなつて、種々の心身の問題点を抱える生徒や保護者が多いことが推測される。学校内のメンタルヘルスは、生徒のみならず保護者も対象として検討する必要性が改めて認識された。

日本学校保健会の調査¹⁾では、近年の子どもの健康問題の背景要因として、小学校・中学校・高等学校のすべてにおいて心に関する問題が身体に関する問題を上回ることが報告されている。今後の学校保健活動においては、メンタルヘルスに関する取り組みの必要性が益々増加していくことが予想される。学校保健室は、学校保健活動を通して抽出された生徒が抱える問題点に関する情報を教員やカウンセラーに積極的に提供し、学校全体で生徒の健康課題解決に

向けて取り組んでいくことが必要である。

総 括

1. 慶應義塾湘南藤沢中高等部（1995年度～2009年度）において、保健室利用状況およびカウンセリング利用者数を集計し、生徒の健康課題を検討した。
2. 保健室来室者は、中等部生は外科的、高等部生は内科的理由による者が多く、調査期間の15年間を通して、高等部生の来室者数数が中等部生より多かった。中、高等部ともに来室者数に明らかな性差はなかった。
3. カウンセリング件数は、中等部・高等部共に増加し、特に高等部の増加が著しかった。カウンセリング利用者では、生徒に加えて保護者の利用が増加した。
4. 保健室は学校保健活動を通して抽出された生徒が抱える問題点に関する情報を教員やカウンセラーと共有し、学校全体で生徒の健康課題解決に取り組むことが必要である。

文 献

- 1) 日本学校保健会：保健室利用状況に関する調査報告書。平成18年度調査結果。学校保健の動向平成22年度版。2008
- 2) 神奈川県私立中学高等学校保健会：保健室来室者から見えてくるもの。子どもの心と体の研究会：2009